

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1200集

# 原遺跡 17

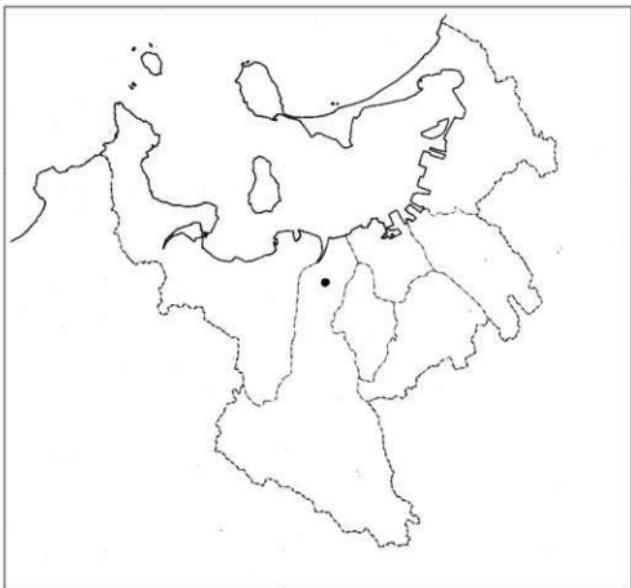
— 原遺跡第29次調査報告 —

2013

福岡市教育委員会

# 原遺跡 17

－ 原遺跡第29次調査報告 －



調査番号 1131

遺跡略号 HAA-29

2013

福岡市教育委員会

# 序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さんに活用していただくために、文化財の保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、平成23年度に発掘調査を実施した、原遺跡第29次調査の成果を報告するものです。本調査では、中世を中心とした集落遺構が発見されました。これらは、当時の早良区原の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さまの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者のみなさまをはじめとして、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

## 例言

1. 本書は、福岡市早良区原6丁目地内における共同住宅建設事業に先立って、福岡市教育委員会（調査時点）が平成23年度に発掘調査を実施した、原遺跡第29次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書の作成は、国庫補助事業として実施した。
3. 発掘調査および整理報告書作成は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課（調査時）の松尾奈緒子が行った。
4. 方位はすべて磁北であり、真北より6°40'西偏している。また、座標は、日本測地系（第II系）を用いている。
5. 遺構は、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、井戸をSE、性格不明遺構をSXと略号化して、記述した。
6. 本書に掲載した遺構の実測は、松尾・藏富士寛・福薗美由紀が行い、写真撮影は松尾が行った。  
遺物の実測・製図および写真撮影は松尾奈緒子が行った。
7. 貿易陶磁については以下の文献の分類を参考にした。  
太宰府市教育委員会2000「太宰府条坊XV—陶磁器分類編—」太宰府市の文化財第49集
8. 附論として、福岡市埋蔵文化財調査課福薗美由紀による薩摩焼に関する論考を掲載している。
9. 本報告書にかかる遺物・記録等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、保管・公開する予定である。

## 本文目次

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 第1章はじめに                               | 1  |
| (1) 調査に至る経緯                           | 1  |
| (2) 調査体制                              | 1  |
| 第2章 遺跡の立地と地理的歴史的環境                    | 2  |
| 第3章 調査の記録                             | 4  |
| (1) 調査の概要                             | 4  |
| (2) 遺構と遺物                             | 6  |
| (3) そのほかの出土遺物                         | 10 |
| 第4章まとめ                                | 10 |
| 府論 原29次調査出土薩摩焼について(福岡市埋蔵文化財調査課 福薗美由紀) | 10 |

## 挿図目次

|   |    |
|---|----|
| 第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)                                  | 2  |
| 第2図 周辺調査地点 (S=1/2500)                                     | 3  |
| 第3図 基本層序柱状図 (S=1/20)                                      | 4  |
| 第4図 調査区位置図 (S=1/500)                                      | 4  |
| 第5図 遺構配置図 (S=1/80)  | 5  |
| 第6図 SK005 実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)                    | 6  |
| 第7図 SX007・008・030 実測図 (S=1/40)                            | 7  |
| 第8図 SE033・049 実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)                | 8  |
| 第9図 SD043・044・045・046 東壁・西壁土層実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3) | 9  |
| 第10図 そのほかの出土遺物実測図 (S=1/3)                                 | 10 |
| 第11図 SE011 出土薩摩焼実測図 (S=1/2)                               | 10 |

## 図版目次

|     |                            |                           |
|-----|----------------------------|---------------------------|
| 図版1 | 1 調査区全景 (西から)              | 2 SD043・044・045・046 (西から) |
|     | 3 調査終了後確認トレンチ (西から)        |                           |
| 図版2 | 1 SX007 (北東から)             | 2 SX008 (北東から)            |
|     | 3 SX030 (東から)              |                           |
| 図版3 | 1 SK005 (北西から)             | 2 SE033 井筒検出状況 (南から)      |
|     | 3 SE033 井筒検出状況 (北から)       |                           |
| 図版4 | 1 SD043・044・045 東壁土層 (西から) | 2 SD046 西壁土層 (北東から)       |

## 第1章 はじめに

### (1) 調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部(現福岡市経済観光文化局文化財部)は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成23年7月20日、共同住宅建設に先立ち、福岡市早良区原6丁目地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に照会文書が提出された(事前審査番号23-2-360)。当該申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡の範囲内に位置していることから(分布地図番号82-0311・遺跡略号HAA)、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を経て、平成23年8月23日に試掘調査を行い、地表下120cmの黄褐色砂質土上面で中世の遺構を検出した。これをうけて、埋蔵文化財第1課は、この旨を申請者に回答し、その取り扱いについて協議を行った。その結果、申請面積922.48m<sup>2</sup>のうち、ビル建設とともに基礎工事によって遺構の破壊が免れない248.59m<sup>2</sup>について、平成23年に発掘調査、平成24年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が、平成23年10月17日から同年11月7日まで実施した(調査番号1131)。調査面積は165m<sup>2</sup>で、検出された中世の遺構から、土師器・輸入陶磁器などを中心にコンテナ1箱分の遺物が出土した。

### (2) 調査体制

調査を実施した平成23年度および整理報告を行った平成24年度の組織は以下の通りである。

|       |   |
|-------|---|
| 調査主体： | (平成23年度) 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課                 |
|       | (平成24年度) 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課               |
| 調査総括： | (平成23年度) 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫<br>調査第1係長 米倉秀紀      |
|       | (平成24年度) 埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗<br>調査第1係長 常松幹雄      |
| 調査庶務： | 埋蔵文化財第1課 管理係 古賀とも子(現埋蔵文化財審査課管理係)              |
| 事前審査： | 埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下博文(現福岡市埋蔵文化財センター)            |
| 調査担当： | 埋蔵文化財第2課 調査第1係 松尾奈緒子(現埋蔵文化財審査課事前審査係)          |
| 調査作業： | 安部みゆき 尾崎泰正 斎藤純子 栗下純也<br>永井ゆり子 旗生勝介 廣瀬公則 鹿山千代美 |
| 整理作業： | 松下伊都子 宮崎由美子 渡邊宏代 (五十音順・敬称略)                   |

なお、文化財部は、組織改編のため、平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

現地での発掘調査にあたっては調査委託者をはじめとして、関係者のみなさま、地域のみなさまからご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

福岡市は、背振山系・三郡山系から派生する丘陵と、それらに画された柏原・福岡・早良・今宿の各平野から構成される。原遺跡は、このうち、福岡市西部に広がる早良平野の北側にある。早良平野は、博多湾へむかって北流する室見川や十郎川、名柄川などの沖積作用によって形成された平野で、下流域には第三紀丘陵や洪積台地が点在し、沿岸部には帯状に海岸砂丘が発達する。

原遺跡は、このような早良平野の北東部を北流し室見川に合流する金屑川と油山川（稻塚川）に挟まれた、東西約650m、南北約900mを範囲とする微高地に広がっている。標高は5m～7mをはかり、北側は近世まで低湿地であったと考えられている。

周辺では、油山川を挟んで東側の微高地に原東遺跡が、金屑川を挟んで西側の洪積中位段丘上には有田遺跡群が展開する。これまでの調査から、原東遺跡では、環濠や貯蔵穴等の弥生時代前期の集落跡と弥生時代中期前半～中期後半の壇棺墓群が確認されている。一方、有田遺跡群では、2012年度末までに246次もの調査が行われ、旧石器時代から現在に至るまで連綿と人々が生活してきた大規模な遺跡であることが判明している。とくに、縄文時代晩期末頃の環濠集落や早良郡衙と推定される古代の大規模遺構群、大友氏の被官であった小田部氏の里城「小田部城」関連遺構などは、著名である。

原遺跡では、区画整理や都市開発によって、2012年度末までに32次におよぶ調査が行われてきた。その結果、原遺跡が展開する微高地は、中央部の低地と、遺跡の東西を流れる油山川と金屑川に沿つて南北方向に発達した、2本の軸の狭い自然堤防から構成されることがわかつてきている。これら2本の自然堤防は、油山側に由来する東側を微高地A、金屑川に由来する西側を微高地Bとして区別されており、本調査地点は東側の微高地Aの北側に位置している。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

昭和前期の航空写真や古地図からもわかるように、中央部の低地では水田や水路等の遺構が検出されている一方で（1次調査）、微高地A・Bでは、縄文時代晚期から中世までの集落遺構が展開する。微高地上で最も古い遺構は、縄文時代晚期末の竪穴住居や貯蔵穴、貯木遺構等であり、微高地Aの南側で行われた16・17・26次調査で確認された。続く弥生時代中期後半には、集落は甕棺墓をともなって、微高地Aの北側と微高地Bの南側の2箇所に分かれて広がる（9・14・20・22次調査）。古墳時代になると、前期を中心に、集落跡や油山川の旧河道を利用した灌漑水路等の生産遺構も検出されているが、前代に比べて遺構は少ない（3・17次調査）。古代末から中世前半期には、微高地上に集落遺構が広く展開する。とくに、10次・14次調査で検出した、10世紀代～12世紀代に比定される大溝は、西側延長が有田遺跡群においても確認されており、古代官道との関連性や条里の東西方向に一致するものとして注目されている。中世後半になると、微高地A中央部と微高地Bの南部の2箇所で、方形をなす濠をともなう屋敷地が確認されており、中世小名主層のものと推定されている（9・12・16・22・24・27次調査）。



第2図 周辺調査地点 (S-1/2500)

## 第3章 調査の記録

### (1) 調査の概要

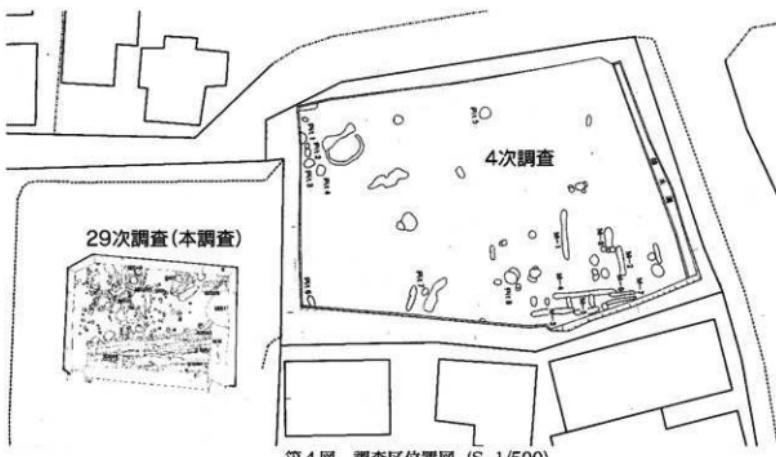
本調査地点は、微高地Aの北部、東側緩斜面にある。東隣地で4次調査、北東隣地で6次調査が行われており、中世後半～近世と思われる数面の水田耕作土の下にあらわれる黄褐色砂質土上面において、古墳時代前期と中世前半(12世紀代)の生活遺構が確認されている。主体となるのは、中世前半の掘立柱建物や井戸、土坑、柱穴等であり、古墳時代前期の遺構は少ない。同様に、西側隣地で行われた56-12-21試掘においても、中世前半の溝や土坑、柱穴等の遺構が検出されている。このような周辺の調査成果から、本調査地点においても、中世の生活遺構のひろがりが予測された。

本調査地点の現況は宅地で、現地表面の標高は、5.6m前後である。調査は、2011年10月17日から着手し、第3図に示した近世・近代の遺物を含む表土・真砂土盛土、耕作土である暗灰色砂礫混土・褐色砂礫混土を重機によって除去し、検出した黄褐色粘質土上面を遺構面と設定した。現地表面から約1m～1.3m掘削すると遺構面となり、遺構面の標高は4.4m～4.6mをはかる。西から東にむかってゆるやかに傾斜する。調査区南端では、遺構面の黄褐色粘質土が中世後半～近世と思われる耕作土によって削平されており、黄褐色粘質土の下に堆積する茶褐色砂礫～黄灰色シルトを遺構面とした。調査区南端の遺構面の標高は4.1m程度である。

検出した遺構は、中世の溝、土坑、井戸、柱穴等を主体とするが、図5に示した遺構には生痕も多く含まれている。これらの遺構から土師器・輸入陶磁器・瓦等の遺物がコンテナケース2箱分出土した。11月2日に高所作業車を用いて調査区の全景を撮影した後、最終的には2011年11月7日に調査を完了した。

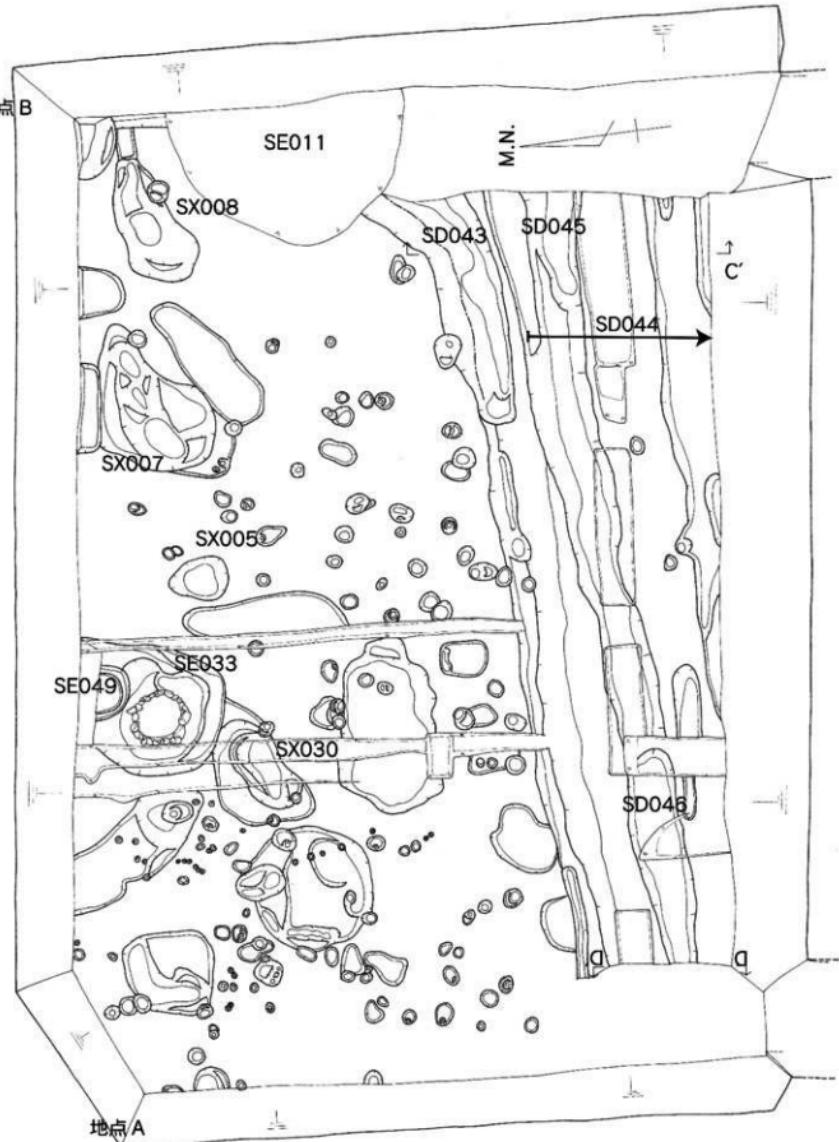


第3図 基本層序柱状図 (S-1/20)



第4図 調査区位置図 (S-1/500)

地点B



第5図 造構配置図 (S=1/80)

## (2) 遺構と遺物

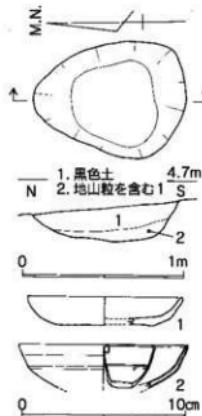
### ① 土坑

#### SX005 (第6図・図版3-1)

調査区北側中央部で検出した楕円形の土坑である。検出面の標高は4.5m前後である。主軸をほぼ南北にとり、長軸0.9m、短軸0.7mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは0.2mをはかる。覆土は、黒色土を主体とし、底面近くでは地山粒を含む。出土遺物から、11世紀代の遺構と考えられる。

#### [出土遺物 (第6図)]

1・2ともに破片である。1は底部に糸切りの痕跡をもつ土師器皿である。胎土は淡褐色を呈し、小碟を少量含む。摩滅が著しく、口縁部の性格な形が実測図に表現できているかこころもとない。2は口縁部に輪花をもつ白磁皿である。VI類か。胎土は黒色粒を含む灰白色で、灰乳色の釉がほどこされている。



第6図 SK005 実測図 (S-1/30)  
出土遺物実測図 (S-1/3)

#### SX007 (第7図・図版2-1)

調査区北東部で検出した不整楕円形の土坑である。標高4.5m前後で検出し、主軸をほぼ東西にとる。土坑の規模は、長軸約2.7m、短軸1.8mをはかる。底面、壁面とともに凹凸が著しく、最も深い部分では、検出面から0.9m残存する。覆土は、砂礫を含む灰褐色粘質土を主体とし、底面近くではやや粘性が強くなる。一度に埋め戻された痕跡はみとめられなかった。

中世の遺構と同じ土質をもつ柱穴にきられるが、SX007からの出土遺物はなく、時期は不明である。

#### SX008 (第7図・図版2-2)

調査区北東隅で検出した不整楕円形の土坑である。SX07の東側約1mに位置する。検出面の標高は4.4m前後で、主軸をほぼ東西にとり、長軸2.1m、短軸0.85mの不整楕円形を呈する。SX07と同様に、底面、壁面ともに凹凸があり、検出面からの深さは最も深いところで0.6mをはかる。覆土は、灰褐色粘質土を主体とし、底面近くではやや粘性が強くなる。

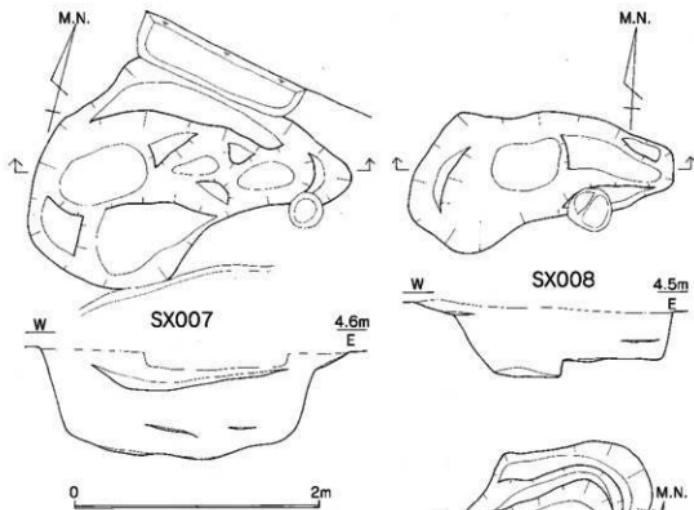
中世の遺構と同じ土質をもつ柱穴にきられるが、SX007からの出土遺物はなく、時期は不明である。

#### SX030 (第7図・図版2-3)

調査区中央部で検出した、東西に主軸をもつ不整楕円形の土坑である。標高約4.5mで検出した。土坑の規模は長軸1.4m、短軸0.7mをはかる。検出面から約0.5m残存する。覆土は、SX07・SX08に類似する灰褐色粘質土を主体とする。

中世の遺構と同じ土質をもつ柱穴にきられるが、SX007からの出土遺物はなく、時期は不明である。

SX007・008・030は、規模や形態、覆土、遺物がまったく出土しない等、特徴を同じくしている。とくに、SX007・008は、長軸方向の西側の幅が広く東側が狭い涙形をなす点で、類似性が高い。また、SX007・008・030の配置をみると、一直線上に並んでいることがわかる(第5図)。このことから、これら3つの土坑は同時期に同じ性格をもっていたことが推測される。



## ② 井戸

### SE033 (第8図・図版3-2・3)

調査区北側中央部において、標高4.6m前後で検出した井戸である。堀方は直径約2.1mの不整円形プランをなす。検出面から0.9mの深さで1.5m前後の不整円形の平坦面を形成し、そこからさらに一段深く、直径0.7m前後の円形に0.2m程度掘り下げて、集水部としていた。集水部の上端には、集水部を囲むように1段のみ拳大の石が配置されていた。木桶等の井側の痕跡は認められなかつたが、造構を掘削する途中の標高4.3m前後から、土質の違いとして井筒の形を平面的に検出することができた。

堀形覆土は、上層は黒色砂質土、下層は灰褐色砂質土を主体としており、井筒内の覆土は地山ブロックを含む黒色粘質土で、集水部に近くなると灰褐色砂質土となる。

SE033と同様の構造の井戸は、北東隣地の6次調査でも調査されており(SE03)、井側の裏込に粘土が使用されているが、SE033ではみられなかつた。

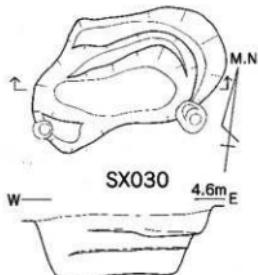
井筒出土の土器から11世紀代～13世紀代の井戸であると考えられる。

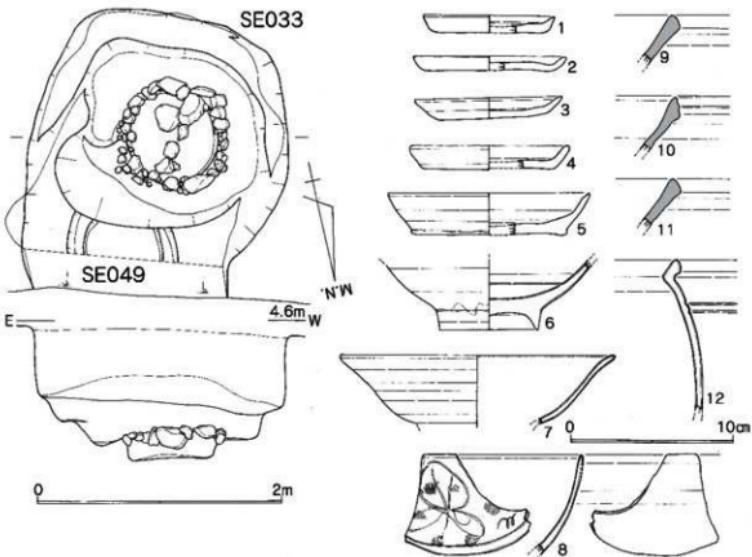
### [出土遺物 (第8図)]

2～12がSE033出土遺物である。2・3・6・9・10は堀方上層、8は堀方下層、4・5・7・11・12は井筒から出土した。

2～4は土師器皿、5は土師器坏である。底部はすべて糸切りで切り離され、3のみ板压痕がのこる。5の内底部には回転ナデの後、定方向ナデが仕上げられる。6は白磁碗V類で、黄灰色の釉かけら

第7図 SX007・008・030 実測図 (S=1/40)





第8図 SE033・049 実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

れ、内定面には砂粒が付着し、重ね焼の痕跡がみられる。7は口禿の白磁碗IX類で、釉色は空味がかつた乳白色。8は内面に櫛描文がえがかれた龍泉窯系青磁碗I類、9～11は東播系須恵器こね鉢である。12は中国陶器壺で、胎土は淡赤褐色、釉は淡褐乳色である。

#### SE049 (第8図)

調査担当者の注意不足で、SE033の集水部を検出するまで切り合いで気が付くことができなかつた井戸である。北半は調査区外へ続く。SE033の集水部を検出する過程で、直径約0.9m程度のSE049の集水部を認識したため、切り合いで関係を検討することができず、先後関係は不明である。SE049集水部は、直径約0.9mの不整円形をなし、深さはSE033の集水部検出面から約0.3mをはかる。土質の違いから直径0.7m程度の井側の痕跡が認められた。SE033と異なり、集水部上面に配石はない。

#### 〔出土遺物 (第8図)〕

1は土師器皿である。回転ナデで仕上げられ、底部は糸切り調整後、板の圧痕がのこる。

#### ③ 溝 SD043・044・045・046 (第5・9図・図版1-2・4-1・2)

調査区南端では、遺構面の黄褐色粘質土が、耕作土(図9 土層4・5)によって削平され失われていた。この耕作土は中世前半の柱穴を破壊する一方で、近代のSE011にきられることから、中世後半～近世のものと考えられる。この時期に耕作地として利用するために、南へむかってひろく造成されたものとおもわれる。東端で検出したSD043は土層観察からこの耕作土との関係が明かではないが、

黄褐色粘質土上面で検出されたことから、造成時か造成後に掘削されたものと考えられる。

SD044・045・046は、黄褐色粘質土の下に堆積する茶褐色砂礫～黄灰色シルトの上面で検出した。すべて造成方向に主軸をとる。SD045とSD046は攪乱にきられて分断されるが同一の溝と考えてよいだろう。土層を検討した結果、SD045・046の埋没後に幅の広いSD044が再び掘削されたと考えられる。出土遺物が少ないため、これらの溝の掘削時期は不明であるが、出土遺物はSE033と同時期のものに限定される。

#### SD043 (第5・9図・図版1-2・4-1)

黄褐色粘質土上面で検出した溝である。東西方向に主軸をとる。検出面の標高は4.5m、検出長約4mをはかる。幅は約1m、検出面から0.5mほど残存しており、断面は台形をなす。覆土は耕作土に近い灰褐色土を主体とし、下層ほど粘性が強くなり、鉄分の沈着がみられる。土層から滯水環境にあつたと推測される。

#### [出土遺物 (第9図)]

3は内面に沈線がめぐる白磁Ⅲである。VI類か。釉色は淡灰色で、外底部は露胎となる。

#### SD044 (第5・9図・図版1-2・4-1)

茶褐色砂礫上面で検出した溝状造構である。検出面の標高は4.1m前後である。大半が調査区外へと続くため、正確な規模は不明であるが、幅は少なくとも3.5m以上となる。底面は溝状の凹凸が複数あり、安定しない。覆土は暗灰色粘質土を主体とする。

#### [出土遺物 (第9図)]

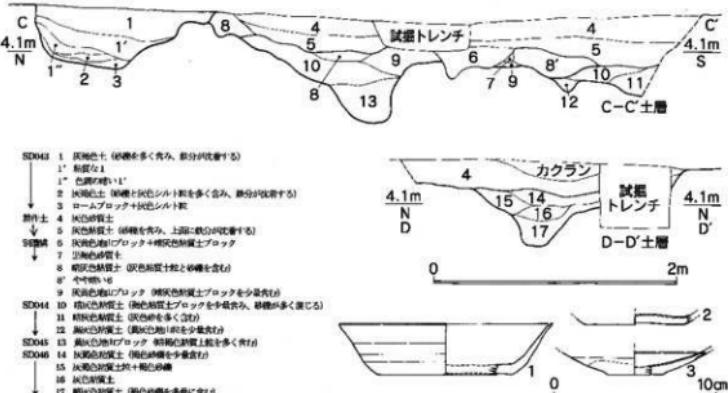
2は口禿の白磁Ⅲ類である。灰乳色の釉がほどこされ、外底面は工具でうすくのばされている。

#### SD045・046 (第5・9図・図版1-2・4-1・2)

SD044の下面の標高4m前後で検出した溝状造構である。検出面における幅は0.7m～0.8m、深さは0.2m～0.4m程度残存しており、断面はU字形ないしは台形をなす。標高の高い西側ほど底面の標高も高くなっている。覆土は黄褐色粘質土を主体とし、滯水環境にあったことが予測される。

#### [出土遺物 (第9図)]

1はSD046から出土した土師器環である。淡橙褐色を呈し、底部は糸切り調整される。



第9図 SD043・044・045・046 東壁・西壁土層実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

### (3) そのほかの出土遺物 (第10図)

1はSP001から出土した土器皿、2はSP017から出土した土器器環である。2点ともに内面は不定方向ナデで仕上げられ、外面は糸切り調整され、板の圧痕がのこる。2は、復元底径が8cmである一方で、器壁が厚く6mmをはかる。



第10図 そのほかの出土遺物 (S=1/3)

## 第4章 まとめ

本調査では、周辺の調査成果と同様に、中世の生活遺構を検出することができた。これらの遺構は、微高地頂部に近い調査区中央から西側に集中する傾向にあり、西側隣地で行われた試掘調査56-12-70において弥生時代や中世の遺構が多く検出されていることからも、本調査地点の西側ではさらなる遺構のひろがりが期待される。また、調査区の南側では、略東西方向を指向する中世の溝が検出され、その後、さらにひろく造成され水田として利用されていた状況が明らかになったことから、本調査地点の南側は中世以降、生産域として利用されていた可能性が考えられる。

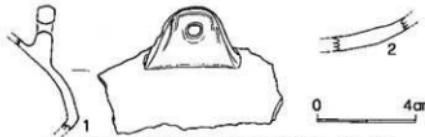
一方で、本調査地点の遺構の量は、北東側の6次調査や西側隣地の56-12-70試掘に比べて少なく、遺構面の標高も約0.5m低くなっている。また、本調査の出土遺物には、弥生土器や須恵器などの中世以前の遺物がほとんど含まれていない。このことは、本調査地点およびその周辺では、中世以前の遺構が少なかったことを示している。

## 附論 原29次調査出土薩摩焼について

福岡市埋蔵文化財調査課 福嶋美由紀

原遺跡では近代の井戸とともにわれる攪乱から薩摩焼が2点出土した。第11図に示した1・2は、ともに苗代川産の土瓶である。1はいわゆる算盤形で胴部半ばに鋭い棱をもつ。取手の部分には、沈線で模様が描かれる。釉調は、オリーブ褐色を呈し、内面にも釉垂れが見られる。胎土は橙色で、径1mm以下の白色粒が少量混ざる。18世紀以降のものである。薩摩焼土瓶が近世以来、藩外へ商品として流通していたことを裏わせる記述は、橘南窓『西遊記』(1795)などに記されており、これまでにも薩摩領外の遺跡で薩摩焼土瓶が出土している。本資料は、いざれも攪乱中出土遺物であるが、福岡市内の遺跡における薩摩焼土瓶の初見であり、薩摩焼土瓶の流通および消費地を知る上で貴重な資料であると言える。今後の資料の増加に期待したい。

参考文献：渡辺芳郎 2006「近世薩摩焼の藩外流通に関するノート」『金大考古』第53号

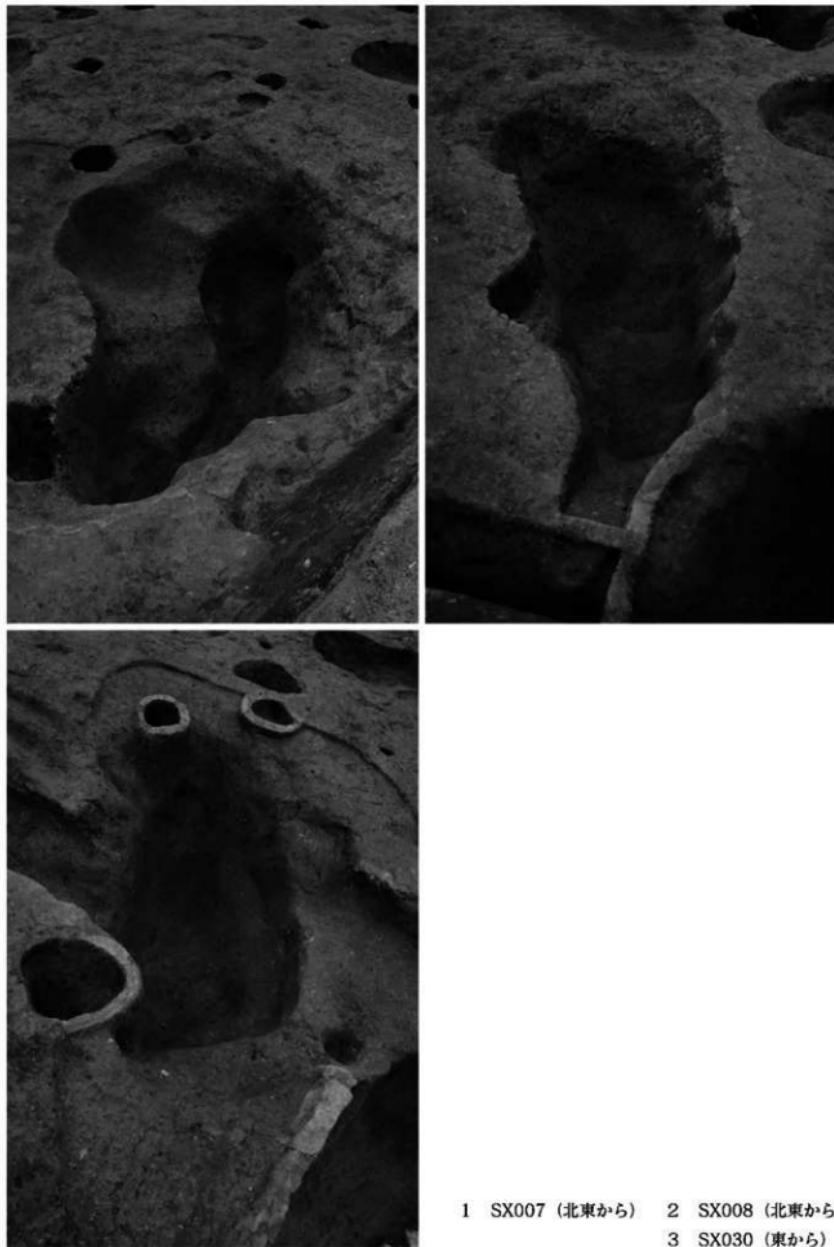


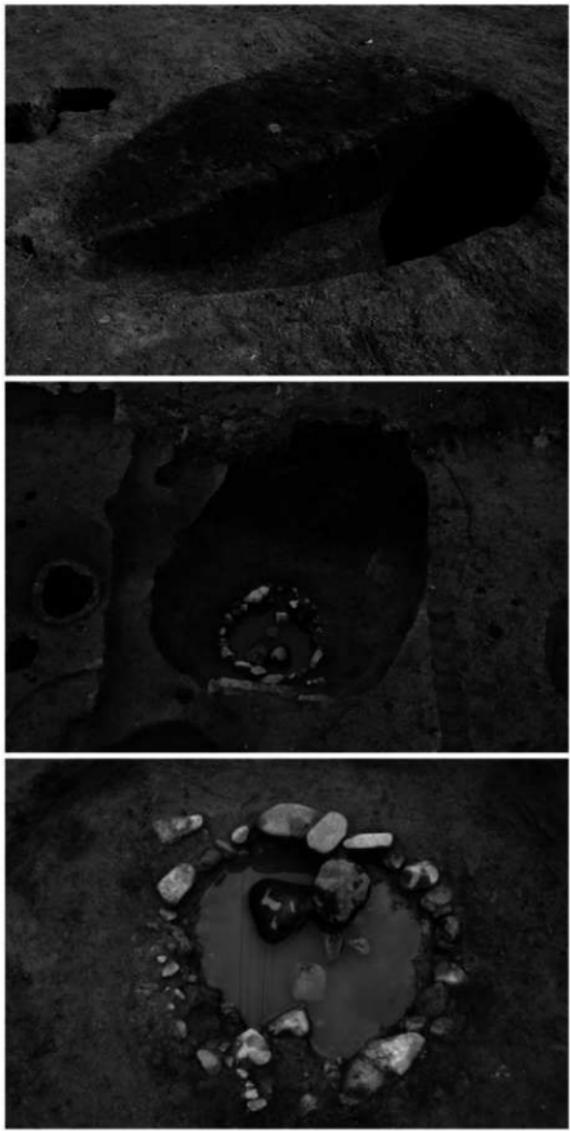
第11図 SE011 出土薩摩焼実測図 (S=1/2)



1 調査区全景（西から）  
2 SD043・044・045・046（西から） 3 調査終了後確認トレンチ（西から）

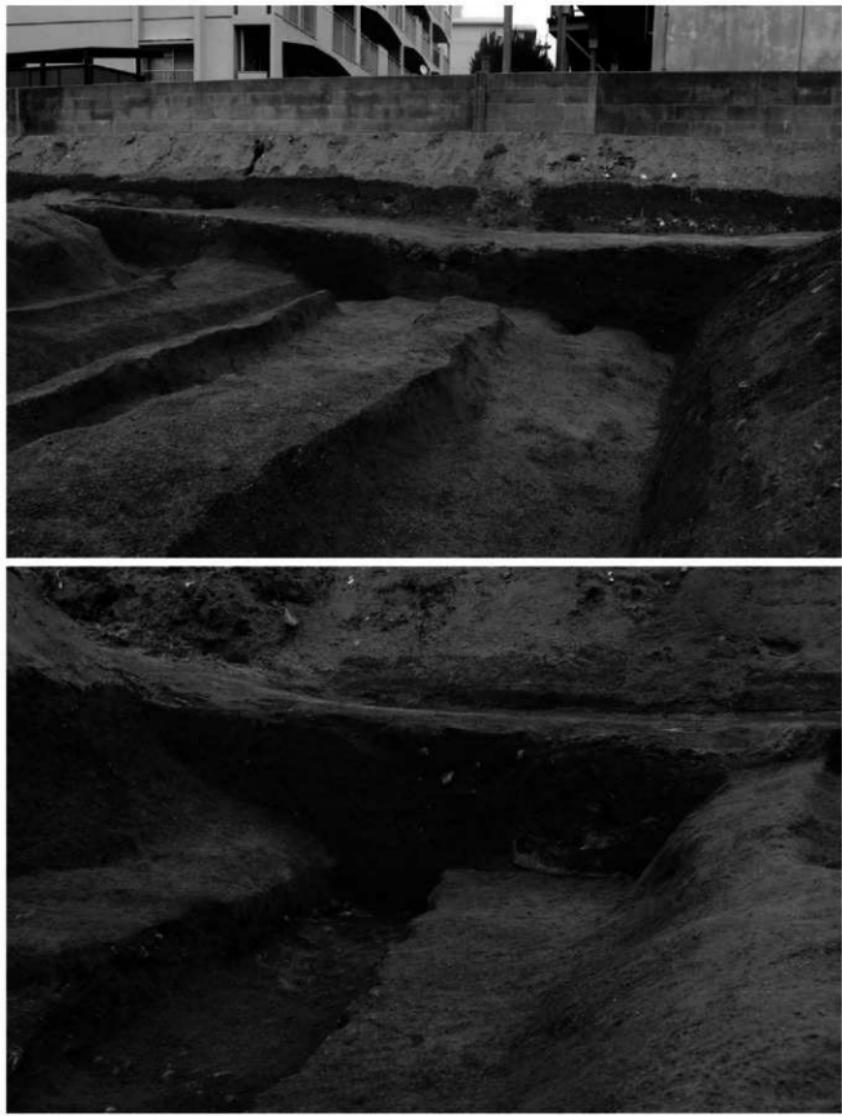
図版 2





1 SK005 (北西から)  
2 SE033 井筒検出状況 (南から)  
3 SE033 井筒検出状況 (北から)

図版 4



1 SD043・044・045 東壁土層（西から）  
2 SD046 西壁土層（北東から）

## 報告書抄録

---

はら　い　せき  
**原遺跡 17**

— 原遺跡第 29 次調査報告 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1200集

2013(平成25)年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
(092)711-4667

印刷 株式会社月成印刷  
福岡市博多区大井2-13-27  
(092)611-3600

---